

あの日を忘れない。

昭和51年10月29日。

忘れることのできない日。

酒田大火が起こった日である。

延々と約11時間も燃え続け、市街地中心部を

焼き尽くした酒田大火。

被災当初は茫然自失ぼうぜんだった市民も、翌朝の焼け跡の整理から、復興へ向けて歩み出した。

全国各地からは8億4千万円以上の義援金や

救援物資が届けられ、市民を勇気づけた。

市では、翌年からのこの日を「酒田市防災の日」と定め、

酒田大火から2年6か月後の昭和54年5月19日に

大火復興式典で復興宣言を行った。

酒田大火の記憶を風化させないために、写真などで

当時を振り返る。



▲炎に包まれる中心市街地



▲新井田川に迫る火の手



忘れてはならない酒田の恩人 「竹中義男さん」

酒田市在住 前田直己

「第6師団長の竹中義男さん」と言っても、多くの市民は記憶にないと思う。

竹中義男さんは、37年前の酒田大火の際、救助に駆け付けた自衛隊の責任者である。

師団長は酒田大火をテレビニュースで知り、「自然状況、地理状況、社会状況」を考え合わせ、揮下の20連隊に緊急招集をかけ、装備を整え、訓練として神町（東根市）から酒田に向け出発した。師団長は部隊の先頭で指揮を執った。山形県知事からの派遣要請を庄内町清川で受け取り酒田に急行した。

市街地は猛烈な火炎に包まれていた。即時に普通科連隊の精鋭550名が救助活動を開始した。その姿が市民の目にどのように映ったか？

酒田大火とよく対比されるのが、阪神淡路大震災である。自主派遣の基準が明確でない当時、最悪の状況を想定し派遣を決断した第6師団長。特に救助活動は時間との戦いでもある。

後日、父の所に訪れた師団長は「今回の部隊の派遣は、自分の責任で行いました」と話された。

この短い言葉に、師団長の長たる者の決断と責任、人間性がにじみ出ている。この「師団長の決断」が大火の被害を最小限に食い止めたといえる。酒田市民が忘れてはならない人の一人であり、酒田の恩人だと思う。

残念ながら、竹中義男さんは1993年鬼籍に入られた。ご冥福をお祈りしたい。



▲左から竹中義男氏、板垣清一郎山形県知事（当時）、相馬大作酒田市長（当時）

【焼失面積】22.5 ㍻

【死者数】1名

【罹災数】1,023世帯 3,301人

【被害総額】405億円



▲林消防庁長官（当時）を中心とした視察団



▲市役所駐車場での自衛隊歓送会